

平成二十六年 中学校入学試験問題（Ⅰ期） 国語 不二聖心女子学院

（解答はすべて解答用紙に記入すること）

受	験	番	号

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

大山勇作さんは十五年にわたって屋久島高山岳部の顧問であった人で、屋久島の山という山を歩いている。山を歩きの自然に心をうたれ、また、その自然を乱伐というかたちで破壊するものを目にし、「屋久島を守る会」に加わり、その後、記録映画「屋久島からの報告」をつくるなかで「屋久島の自然を記録する会」をケツセイしている人である。

この大山さんが、これだけ雪が降ったら、行って行けなくはないが相当きびしいですよという。もちろん日帰りはできない。完全な冬山ソウビで出かけて山小屋の一泊は必至だという。キャラバンシューズで行くなど論外である。登山道も雪に埋もれてわからなくなっているからよほど屋久島の山に詳しい者が同行しなくてはキケンなことだった。私には冬山登山の経験はない。東京を出てくるときはそこまで考えてはいなかった。

大山さんの話ですっかりくじけてしまい、縄文杉に会うことは九割がたあきらめたのだが、それでもまだ末練があつた。

「稔君が行くのなら安心だけだねえ」

大山さんの言葉であつた。川崎さんの弟の稔さんがその夜鹿兒島から帰ってくるので、私を縄文杉へ案内してくれるかどうか聞いてみようという川崎さんの話があつて、そういうことならという大山さんであつた。稔さんは学生時代からの登山家でヒマラヤの山にも遠征している。屋久島の山は自分の庭のように歩いている。④「一、その稔さんでも冬山の経験がなく五十もすぎた足弱の都会人を連れて行くのはどうか。大山さんの言葉には、⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿」

大山さんの家から帰る車のなかで、川崎さんがそう言った。やっぱり無理かなあと思いつつながら私は、川崎さんはこれまで何回ぐらい縄文杉を見に行きましたかと、何気なく聞いてみた。⑦「一意外なことに、まだ一度も行っていないという。屋久島に生まれ育って屋久島の自然に惹かれ、大山さんたちの会のメンバーでもある川崎さんが、縄文杉を一度も見っていないという。奇異な感じであつたが、そのときは、近くにいますといつても行けると思つて案外行かないものかなぐらひに思つて、それ以上はたずねなかった。川崎さんのほうで、話題をそらすふうでもあつた。

⑧「縄文杉を見に行く奴は悪人ですよ」

この言葉はつぎの日の夕方のことだった。縄文杉はあきらめて稔さんの案内でヒョウコウ千メートルあたりの原生林を数時間歩いて帰ったときに、前の日の私との会話の答えのようにして言われた言葉であつた。

⑨縄文杉、縄文杉と言いつづけていた私は、冷水をかけられたようだった。

原生林の表土は脆い。斜面に立っている縄文杉のまわりの表土は人が一歩踏むごとに少しずつ崩れ落ちてゆく。たつた十九年前に発見されたばかりの縄文杉だが、すでに縄文杉の根が露出してきているという。縄文杉を見やすくするために周りの木を伐ったことも表土の維持をわづらわしている。土寄せをする話があるようだが、そんなことで七千二百年のいのちが支えられるのだろうか。⑩「そう川崎さんは言う。このまま人びとが縄文杉を見に行けば、まもなく縄文杉は枯死してしまふ。観光客の縄文杉見物が多いのだが最近では町でも縄文杉を見る催しをしたりして、そんなときには何百人もの人が表土を踏み崩してゆく。

「縄文杉をこれからも生かすには周囲一キロぐらいは立ち入り⑬にするしかないのです」

⑭以前は発見者岩川貞次氏にちなんで大岩杉と名づけられていたこの杉が、近年縄文杉と呼ばれるようになって観光客が多くなった。そのことにも川崎さんは「フマン」であるらしかつた。数千年の巨樹を、そつと、そのままにしておきたい。いずれば枯死するであろうが、人間が余分なことをしないで、自然のいのちの盛衰にまかせたい。七千二百年と言われる巨樹が奥山で生きつづけることを、その山ふもとの里にいて思うだけでよい。川崎さんの気持ちはそういうところにあるようだった。

⑮私は恥じた。浮かれたように縄文杉、縄文杉といっていた自分を恥じた。せつかく屋久島まで来て縄文杉が見られずザンネン、などと言っていた自分が、ひどく薄っぺらな者に思えた。

川崎さんの言葉は前の日の会話への答えであつたが、川崎さんとしてはそれを私に言うべきかどうか一日迷った末のことだったろう。⑯「一、きつかけはたぶん、私とその日歩いてきた原生林への尊敬を語ったことであつただろう。稔さんと二人で歩いた屋久島の森は、私をかつてなく敬虔にしていた。森を歩いたことで私をソめていたその気配が、おそろく川崎さんを、あの言葉を言う気にさせたのであろう。

薄雪を踏んで稔さんと歩いたのは、屋久杉鑑賞ポイントとされている森である。

スーパードで昼食を買いこんで、稔さんの運転で屋久島の中央山岳地帯である奥岳へ登っていった。途中ツブキの黄色い花が道端に咲きみだれていたが、高度が上がるにつれて、これが南の島かといふかる景色になる。折りかさなる山々のあいだを縫い、道がまだら雪になってしばらく行くと森の入口であつた。

リュックを背に森へ入った。（中略）

巨大ないのちが私を押しつつむ。ここでは人間のいのち、動物のいのちが、脆く、たよりなげに思える。そのぶん可愛く、いとおしくも思える。この森の荒々しく巨大な原始のいのちにとりまかれて、私に何が言えるだろう。荒々しさは狂暴凶悪ということではない。あるがままという意味での自然、また、それゆえのやさしさと言いかえてもいい。森のなかで私は、森の巨きないのちが私のからだを貫いているのを感じていた。どう言ったらいいのだろうか、深い安堵といつても少しがう。私の小さないのちが何かハカリしれないものにつながれてゆくようであつた。自分が無限に小さなものと感じられ、同時に無限に大きなものに溶けてゆく気がした。

会うことのできなかつた縄文杉も、こういう森のなかの一本の木であろう。そのことがおのずと分かつた。東京にいてテレビで見たり本で読んだ縄文杉は私のなかで森と切り離されていた。縄文杉一本が亭々とそびえ立っているように思い

こんでいた。それはちがう。それでは全きいのちとはいえない。^⑮
仏陀と名づけられた巨木があった。樹齢千八百年という。屋久杉のなかでは若いほうかもしれないが、千八百年前といえは卑弥呼の時代である、ローマ帝政の時代である、三国志の時代である。それから今までをこの森のなかに立ちつづけてきた木である。うねるような幹が空に伸び、十数種の別の木が着生していた。幹に手をあててから私は、もう一度数歩はなれて木に向かって合掌した。^(注3) この木はこれからまた何千年を生きるのだろうか。私には何も分るはずがない。ただ、森のいのちにつつまれてこの木の前につたとき、私はごく自然に合掌していた。

高田宏『島へ』（問題文の一部に表記の変更、省略あり）

- (注)
- 1 「敬虔」……心から何かを敬う様子
 - 2 「亭々」……大木が高くまっすぐ伸びている様子
 - 3 「合掌」……両手を合わせて拝むこと

問一、——線①「論外である」・⑨「冷水をかけられた」・⑮「いぶかる」の文章中における意味を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ① ア 考えられないことである
イ 予想できないことである
ウ 禁じられていることである
エ 珍しいことである
- ⑨ ア はつとして反省させられた
イ 暗い気持ちにさせられた
ウ うれしい気持ちにさせられた
エ じめじめとした気分になった
- ⑮ ア 息苦しくなる
イ おどろいてしまう
ウ 不思議に思う
エ だまされそうになる

問二、——線②「そこまで考えてはいなかった」とあるが、何を考えていなかったのか、二十字以内で答えなさい。

問三、——線③は、何に対して未練があったのか、文章中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問四、——④「①・⑦・①⑥」に入る言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いないこと。

- 「ア すると イ そして ウ なぜなら エ だが オ ところで」

問五、——線⑤「そういうひびき」の中にこめられていた思いとしてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- 「ア 期待 イ 感動 ウ 後悔 エ 不安 オ 安心」

問六、——線⑥「勇作さんがあそこまで言うのだから……」のあとに続く表現を考えて答えなさい。

問七、——線⑧について、なぜ「縄文杉を見に行く奴は悪人」なのか、説明しなさい。

問八、——線⑩・⑫・⑭はそれぞれどこに係るか、記号で答えなさい。

- ⑩ たった 十九年前に 発見されたばかりの 縄文杉だが、 すでに 縄文杉の根が 露出してきているという。

- ⑫ このまま 人びとが 縄文杉を 見に行けば、 まもなく 縄文杉は 枯死してしまう。

- ⑭ 以前は 発見者岩川貞次氏に ちなんで 大岩杉と 名づけられていた この杉が、

問九、——線⑪「そう」の指す内容を文章中からぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。ただし、句読点は含まない。

問十、——⑬ にふさわしい言葉を漢字二字で答えなさい。

問十一、——線⑮について、なぜ「私は恥じた」のか、わかりやすく説明しなさい。

問十二、——線⑰「あの言葉を言う気にさせたのであろう」について

- (i) 「あの言葉」とはどのような言葉か、文章中から十五字以内でぬき出して答えなさい。
- (ii) なぜ「言う気」にさせたのか、くわしく説明しなさい。

問十三、——線⑲について、なぜ「それでは全きいのちとはいえない」のか、その理由としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 東京にいてテレビで見たり本で読んだりした縄文杉と、本物の縄文杉はのちの重さが明らかにちがうから。
- イ のちとは互いにつながりあっているもので、縄文杉一本だけ切り離してもそれをいのちと呼ぶことはできないから。
- ウ 樹齢千八百年の仏陀杉は屋久杉としてはまだまだ若く、いのちがじゅうぶんに育っているとは言えないから。
- エ 巨大な縄文杉であっても、卑弥呼の時代、ローマ帝政の時代、三国志の時代を押しつづむことができないから。
- オ いのちとは荒々しく巨大なものであり、一本の縄文杉だけではもろく、頼りなげに思えてしまうから。

問十四、——線⑳について、「私」が「ごく自然に合掌していた」のは、どのような思いを持っていたからか、文章中から七字でぬき出して答えなさい。

問十五、——線 a・j のカタカナを漢字に直しなさい。

問十六、大切なことを教えられたあなたの体験について、三百字以内で作文を書きなさい。（別紙原稿用紙に書くこと）

受験番号

受験番号

[illegible]

受験番号

[illegible]